

# 煙の戦士のアカデミア

アイニー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ハンターハンターのモラウをヒロアカに突っ込んでみただけです。

息抜き投稿です

# 目次

煙の戦士	1
試験結果と戦士の過去1	26
入学初日と体力試験	46



# 煙の戦士

「はいスタートおおおおー！」

甲高い男の叫び声。それが辺りに響き渡った。

夥しいビル群……その入り口に並ぶ大量の人。数百人はいるだろうか、そんな大勢の間が状況が分からずに辺りを見渡して様子を確認している。

咄嗟のことにどうするべきか分からないのだろう……スタートの合図が切られているにも関わらずに、周りがどう動くかに自分の行動を委ねていた。

それはプロから見れば失格なのだろう。実戦には合図などない、その時々で自分の頭で考えて行動しなければいけないのだ。

しかし、それを彼らに求めるのは酷というものだろう。

彼らはまだ中学生……もつと正確に言うならば雄英高校の受験生。

そんな彼らも一般的な中学生からしてみれば極めて優秀な部類のものが集まっている。

ヒーローを目指すものの最高峰……倍率300倍を超える雄英高校を受験できている時点で実力が認められたもの達だ。

しかし、ほとんどのものが初めてである実践形式の試験…それと受験のプレッシャー。それが彼らに正常な判断能力を失わせる。

「オイオイオイ！実践にスタートの合図はないゼエええ!!」

迷う受験生達の尻を蹴るように試験官の声が響く。

それに伴ってようやく動き出す受験生達。

我先にと試験場の中へと走っていく。

目指す先は試験場内に配置されているギミック。

ランダムに配置されたそれらは倒すことでポイントを得ることができ、そのポイントを多く集めたものが合格になる。

厳密には少しだけ違うのだが、受験生達に表向きに知らされているのはそれだけだ。

だからこそ、試験が始まったからには、これから起こるのは受験生同士のポイントの奪い合いだ。

ギミックの数は有限…遅れば狩り尽くされ、不利な状況になってしまう。

受験生達はそれが分かっているからこそとにかく走る。誰よりも早くギミックに到達するために。

しかし、物事には何事も常識通りという訳ではなく、入り口に佇みスタートを切っていない一人の男がいた。

その男は一言で言えば異様な男だった。

超個性社会と言われる現代において、異様の基準は限りなく上がっているはずだが、それでも目立つ風貌だった。

肩にかかるほどに伸ばされた白髪を左右に分けて、何故かグラサンをかけている。

堀の深い顔は、彼が日本人ではないことを容易に想像させた。

180を超えているであろう中学生としては高い身長…そして鍛え上げられていることが分かる盛り上がった筋肉。

そしてなによりも目を引くのが彼が持っている煙管だろう。

彼と同じくらいの大サイズの煙管…それはかなりの重量なはずなのだが、彼はそれを苦もなさそうに持ち上げている。

彼は煙管を口元に当てて勢いよく吸っていた。

試験を捨ててしまったのだろうか、それは本人にしか分からないことだが、少なくとも周りからはそう見えるであろう。

少なくとも試験官はそう思った。

「オイオイオイ!! その白髪の奴!!! 試験はもう始まつてるゼエ!! 呑気に吸ってる場合かよ!!!」

試験官の男の声が彼だけに向けて放たれる。

本来であれば試験官として話しかけるべきではないのだろうが、試験官の男：プレゼントマイクの愛称で知られるヒーロー：は、見過ごせなかった。

人生がかかっていると云っても過言ではない受験：それを棒にするような彼の姿勢はプレゼントマイクには勿体なく見えた。

そんな心配の声は勿論彼にも届いており、彼は煙管で吸いながら、片方の手を突き上げて親指を立てた。

心配するなど言いたいのだろうか：それはプレゼントマイクには分からなかったが、彼の中学生離れの風貌に相まって、それは様になつていた。

彼は煙管を離し、手の平を口の前に出してそこに口から空気を吐き出す。

空気と共に吐き出されるのは大量の煙：通常であればすぐに天に昇り消えてしまうであろうそれは、何故かその場に留まり、形をなしていく。

ディープパープル  
紫煙機兵隊

彼の個性の産物であるそれは、煙でありながら実態を持った人型の戦士だ。

精巧に作られたそれらは一つ一つがそれなりの戦力を持つ。

そんな戦士が十数体：彼の周りを囲うように展開された。

「結構条件つけたから作るのに時間がかかっちゃまったな。条件は人間は攻撃せず機械だけを徹底的に排除。そしてさらに他の受験生の救助も条件につける。」



ギミックがどれくらいの高さか分からねえから一体一体に多くのオーラを込めた。

予想以上に数が少なくなつたがまあ充分だろう……」

ここに来て彼が初めてそう呟いた。

誰に向かつて言つたのか分からないその独白は、この場の最善を考えて作つたそれらの性能の最終確認だ。

試験のルール上他の受験生の邪魔をしてはいけないので、かなり注意して作らねばならない……だからこそその確認だつた。

「さあ散れー」

彼の言葉を合図に一齐に駆け出す煙の戦士達。

その戦士達の活躍を期待しながら、彼もようやく試験場へと駆け出した。

その力強い踏み込みは、彼自身の活躍も期待させるものだつた。



受験生が入り混じる試験場。市街地を模したそれに無作為に放たれるギミックを処

理するためには、様々な能力が求められる。

情報収集能力、機動力、判断力、そして単純な戦闘能力。

戦闘に向いた個性ならば容易に処理できるかもしれないが、集まった受験生が全てそうかと言われるとそうではなく、そういったものはギミックの処理に苦戦することになる。

表向き戦闘向き個性に圧倒的優位に作られた試験は、容赦なく力ないものを振り落とす。

そんな試験に打ちのめされたものがここにも一人いた。

紫の髪に目の隈が特徴的な男：心操人使は、あちこちでギミックを倒す強力な個性の持ち主達を見ながら唇を噛み締めて悔しそうに拳を震わせる。

あちこちで派手に戦う戦闘向き個性の持ち主達。それは心操には眩しく見えた。を自由に使ってギミックを倒すものは、心操には眩しく見えた。

それはまるでヒーローとはこういうものだと言っているようで、敵のような個性だと揶揄される自分はヒーローになる資格はないかもしれないと、少しだけ考えさせられてしまう。

しかし、そんなことを思うのはほんの一瞬だ。

今は試験中であり、自分がやるべきことは一体でも多くギミックを倒すことだろうと

心操は思った。

幸いにも、見た目は巨大なメカであるそれらは案外脆く、現状個性が使えず無個性に等しい心操にも上手く狙いを定めればなんとか壊すことが出来た。

しかし、それでも他の受験生に比べれば微々たるものだ。

心操が必死の思いで倒したギミックを、他のもの達は容易く倒していく。

自分が一体倒す時間で二体〜三体あるいはそれ以上……このままでは差が開く一方であつた。

(クソ……このままこんな密集したところでちんたらやったら絶対に追いつけない。なんとか他の奴らがない所へ行かないと)

倒したギミックの破片を投げ捨てて、心操は人がいないであろう路地裏に入つていく。

なりふり構わず全力で走り、路地裏を目指す。

狙い通り辺りに受験生はいない……ならば後はギミックがいるかどうか、こんな路地裏にまでギミックが配置されているかはわからなかつたので、これはある意味賭けだった。

しかし、地力で劣る心操は賭けにでなければ合格は絶対にできない。

(頼むからギミックが配置されていてくれ！)

そんな風に願いを込めながら路地裏を覗く。

「……………よし！ギミックはいる！」

路地裏をうろつく数体のギミック：大小様々なそれらは心操を発見したようで、一斉に向かってくる。

『標的発見！ブツ殺ス！』

『殺ス！殺ス！』

好き勝手に喋るギミック達：仮にも教育機関の試験で使うロボの言葉遣いかとツツコミを入れたくなるが、今の心操にはそんな余裕はなかった。

とにかく一体でも多く倒す：そう覚悟を決めて、辺りに落ちている使えそうなパイプを拾い上げて武器にする。

それぞれのギミックの脆い部分は周囲を観察していたことで分かっていた。

横取りの心配はないだろうが、それでも素早く処理せねばいけない。

心操はパイプを振り上げて、ギミックの頭の部分を思いつきりぶつ叩く。

それだけでギミックは機能を停止して動かなくなる。

(こいつは頭……………こいつは胴……………こいつは分かりづらいが右胸に動力源がある……………！)

正確に弱点のみを突いて攻撃していく。

火力で劣る心操は、無駄な攻撃で使う時間はない。

それが分かっているからこそ、攻撃は最小限に、一振りを大切に扱う。

とにかく早く、一体でも多く、そんな必死の心操の思いに呼応するように体は動き、ギミックをこれまでとは比べ物にならないスピードで倒していく。

ギミックの残骸が積み上がっていく。

パイプを振るい続ける心操。もう体力は限界に近いが、ギミックを倒すたびに気力は上向きになっていく。

(いけるかもしれない……ヒーロー向きな個性じゃなくなつて……！)

憧れていた派手な個性持ち、その反対に馬鹿にされる自らの個性。

ヒーロー向きじゃないことは心操にだってわかつている。でも、憧れてしまったのだ。

笑顔で皆を助けるヒーローに。

「やれる……俺だつてヒーローになれる！」

心操は自分に思い込ませるようにそう言った。

最早パイプを握る手も限界が近く、痙攣が開始めた。

おそらく何日かは筋肉痛で悩まされるだろう。しかしそんなことは関係なかった。

ヒーローになれるかもしれないのだ。ここで手を離すことなどあり得ない。

迫り来るギミック……他のものより大きいそれは、その分ポイントも多い。

疲れで鉛のように重い体に鞭を打ち、パイプを振るう。

疲れがあるにも関わらずに正確に弱点を突いたそれは、ギミックの機能を停止させた。

「ふう、とりあえずここにいる分は全部か。時間がねえ、早く移動しないと!」

一息つきたいと訴える体を無視して、心操は素早く次の目的へ思考を切り替え始める。

その素早い判断力は、心操の利点だ。

しかし、この場でそれは悪い方向に働いた。

『殺スー・ブツ殺ス!!』

大きなギミックに隠れて見えなかった比較的小柄なそれ…次へと切り替えた心操の思考の隙を突くように現れたそれは、心操の目の前まで迫っていた。

「しまっ……」

しまった。それを言う時間すらなかった。

すでに心操の目の前にまで迫ったそれは、最早回避は間に合わない。

それを悟った心操はダメだと分かりながらも反射で目を瞑り、衝撃に備える。

(クソ……やっぱりこんな個性じゃ無理だったのかよ……!)

思わずそんなことを思った。

一筋の光が差したと思つたら結局はこれだ……心操はただただ悔しかった。ギョツと拳を握り衝撃を待つ。

しかし、いつまで経つても衝撃はこなかった。

心操は何が起きたか分からずに、恐る恐るゆっくりと目を開ける。

目を開けた心操の前の光景は衝撃のものだった。

心操の前には自分よりも大きな背中……そしてそれと同じくらいの大きさの煙管をギミックへと振り下ろした男の姿だった。

心操は男が潰したギミックを見て驚いた。

比較的脆く小さいギミックであるが、それがぐしゃぐしゃにつぶされていた。

一体どんな力を加えればそこまで潰れるのだろうか……心操には想像もつかなかった。

心操が驚いている間……男はゆっくりと心操へと振り返り言葉を発した。

「よお……大丈夫か？人の獲物を取る気はなかったが、どうにも対応できてなさそうだったんでな。悪く思うなよ」

低い声だった。中学生とは思えない力強い男の声。

そんな声が男にはよく似合っていた。

ずれたグラサンを直し、巻き上がった埃を落とすその姿は、1分1秒を争う試験の最

中だとは思えないくらい余裕に見えた。

「ああ、いや、正直助かった。アンタが来なかったらダウンしてたよ」

呆然とする心操だったが、なんとか言葉を返すことが出来た。

「そりゃよかった。時間も残り少ないしお互い頑張ろうぜ……」

親指を立ててそう言う男。

そんな男が心操には眩しく見えた。

この試験では受験生同士というのは言うならば敵同士だ。

限られたポイント争う敵……なのにも関わらずこの男はそんなことは関係ないという風に心操を助けた。

同じ状況にあつた時、自分に同じことができるだろうか。心操はそう自問した。

出来ないかもしれない……これが実際の現場なら助けるだろうか、この試験の場では恐らく見捨ててしまうだろう。

試験である以上大怪我を負うようには出来ていないだろうし、怪我をしても英雄には優秀な治療個性持ちがいる。

それを言い訳にして自分は見捨ててしまうだろう……心操はそう結論づけた。

だからこそ心操は気になった。目の前の男が何故自分を助けたのかを。

時間がないことはわかっているが、聞かねば後悔する気がした。

「アンタはなんで助けてくれたんだ？ そんなことしたってアンタに得はないだろ」



それを聞いた男はグラサンをずらし驚いたような目で心操を見て、そしてすぐに笑った。

「ハハハ！それを聞くのはナンセンスだろ！俺達ヒーロー目指してんだ…！人助けに理由なんてねえよ！」

「ああ、そうだな。ヒーローってのはそういうもんだ…！」

嗚み締めるように心操はそう言った。

心操が目指したヒーローとはそういう存在だった。

損得なんて関係ない。困った人がいれば助けるのだ。

それがヒーロー…敵と揶揄されてきた心操だからこそ、心は誰よりもヒーローであるべきだった。

それを思い出した心操は顔を思いっきり叩き、自分に喝を入れる。

下を向いていた顔を上げた時、そこにいたのは紛れもないヒーローだった。

心操のその顔を見て、男は笑いながら心操の肩を叩いた。

「いい顔になったなボウズ！それでこそヒーローだ！」

「ボウズって、同じ年だろ！」

「よおし！時間もねえ、ラストスパートと行くか…！」

「俺の話聞けっ！」

心操がそこまで言ったところで、辺り一帯が大きく揺れた。

それに素早く男は反応し、心操に指示を出す。

「ここじゃあ建物が倒れてきたらどうしようもない！大通りに出るぞ……！」

「……おう……！」

二人は素早く路地裏から抜け出し、大通りに出る。

そこで二人は運がいいのか悪いのか、揺れの原因と対面することになった。

それは今までのギミックとは比べ物にならないほどに巨大なギミック。

それを見て心操は説明会の時に言われたことを思い出した。

「あれがお邪魔ギミックか！アンタ、あんなの相手にしても仕方ねえ！逃げるぞ……！」

お邪魔ギミックはポイントにならない。

それを説明会で聞いていた心操はすぐに逃げることを提案する。

それが普通の判断だ……あれだけの大きさ、倒せるとも思えないし倒せた所でポイントにならないのでは意味がない。

「いや、あれ止めるぞ！」

そんな心操の提案を男はすぐに一蹴した。

心操はその訳がわからず、思わず男に向けて吠えた。

「なんで!?!他の奴らだつて逃げてる! わざわざあんなのに時間を割く必要はないだろ

！」

「落ち着け、あのギミックにばっか目がいつて周りが見えてないぞ」

「周り？周りだつて逃げて」

そこまで言つて心操は言葉を止めた。

お邪魔ギミックに目がいつて見えていなかったが、逃げ遅れているものが何人かいた。

巨体が起こした揺れが起こした瓦礫に怪我をしたのか、明らかに動きが鈍いものもいた。

「お前個性は？」

男が心操に向けて言った。

それに心操は少しだけトラウマを思い出し言葉が詰まるが、明らかに急を擁する状況。速やかに応える。

「俺の個性は洗脳だ。言葉をかけて答えた相手を洗脳できる」

改めて自分で言うとなんて敵らしい個性だろうか…心操はそう自嘲した。

しかし、それを聞いた男は笑った。

「いい個性だ！この場じゃ2番目にいい個性だよ！一番は勿論俺だがな…！」

「いい個性つて、こんな個性じゃ何も！」

何も出来ない……それを心操自身分かっていた。

しかし、男はそれを否定する。

「いいやそんなことはねえよ！洗脳で力ありそうな奴片っ端から連れてこい！それで逃げ遅れてる奴らを助けてやれ！」

助ける……それを自分の個性で出来るとは心操は思っていなかった。

敵のような個性だからと人助けに使うことを頭から外していた。

だからこそ男の言葉は心操に響いた。

「こんな個性でも人助けが出来るのか……こんな敵みたいな個性でも……！」

グツと拳を握り締めて反芻する。

そんな心操を見て、男は思いつきり背中を叩いた。

「ああ……出来る……お前はヒーローになれるんだ……！」

ずっとかけて欲しかった言葉。

敵だと揶揄されて笑われるなかで、ヒーローを目指しているとは言いづらかった。それでもずっと思いは秘めていたのだ。

ヒーローになりたい、そして皆にそれを認めて欲しかった。

後指を差される中で、そんなことを気にせず背中を押ししてくれる人が欲しかった。

とつづく諦めていたが、そんな男は目の前にいたのだ。

心操は痺れる背中に何か熱いものが巡ることを感じながら、勢いよく走り出した。言葉を交わすことはしなかった。

そうしたら泣いてしまいそうだったから……泣き顔で人助けなどできないであろうから。

駆ける心操の背中を見て、男は満足そうに笑い、すぐにお邪魔ギミックを見つめて真剣な表情になる。

「俺は俺の仕事をするか」

そう言う男は発動していた紫煙機兵隊を解除した。

そうするとみるみるうちに力が溢れ出てくるのを感じた。

紫煙機兵隊に使っていた分の力を戻したのだ。それは当然のことだった。

戻した力を男はすぐに使う。

掌に男にしか見えない球状オーラのようなものを出す。

それは紫煙機兵隊の核。これに煙で形を作り、戦士達は出来上がる。

「とりあえず頭数が必要だ……！命令は単純で性能も最低……！それなら60はいける……！」

男が現在出せる紫煙機兵隊の限界は正確には78体。これに現在の体調を考慮して、今現在の限界は60体だった。

大量に作った反動で体から力が抜けるのを感じながら、男は紫煙機兵隊を操る。

作戦を完成させるための位置どりをさせ、自らは煙をさらに吐き出す。

それによつて出来たのは、一本の太い煙の綱だった。

煙ということで見た目上は脆く見えるそれは、実は鉄以上の硬度を誇る。

それを紫煙機兵隊につかませて、左右に配置する。

男が準備をすすめていると、横から声がかけられる。

「おーい!!とりあえず頭数連れてきたぞ!!」

手を振りながら大声で言う心操、時間がないなかでそこまで大人数を集めることは男は期待していなかったが、心操は男の予想を超える人数を連れてきた。

恐らく恥も外聞も捨ててとにかく叫んだのであろう、若干枯れている声からそんなことを男は感じた。

「よし・とりあえず逃げ遅れてる奴らの避難を頼む!ギミックは俺の方でなんとかする  
!」

「おう!!とりあえず救助だ!瓦礫をどかすぞ!!」

心操は周りの者たちにそう指示を出す。

男もそれに加わる。

思ったよりも多い人数が集まったおかげか避難はある程度早く終わり、一先ずギミック

クと距離を離すことができた。

しかし、ギミック自体を止めなければこの後も被害が拡大するかもしれない。それを阻止するために、男は動き始めた。

「避難はとりあえず終わった！ギミックはどうする!?」

心操が不安そうに言った。

それもそうだ。心操はギミックを倒す方法を聞いていない。

あんな大きなものをたった一人の人間がどうにか出来るとは心操は思わなかった。

しかし、そんな心操の心配を他所に男は自信満々に言う。

「下準備は終わってる！後はあのデカブツを寝かすだけだ！」

男はひたすらに気を伺う。タイミングは一瞬：身逃すわけにはいけなかった。

ギミックが悠々と地面を踏み締める。

一歩一歩が地割れを起こすほどの重量。

だからこそ、その重量を利用する。

ギミックが次の一歩を踏み出すその瞬間：男は大声で指示を出した。

「今だ：！引け！」

左右に配置された紫煙機兵隊がその合図を聞いて思いっきり綱を引く。

引かれた綱はピンと真つ直ぐに張り、ギミックの足に引っかかる。

凄まじい脚力に綱を引く手が負けそうになるが、なんとか持ち堪え、ギミツクの重心を崩すことに成功する。

重心さえ崩れれば後は自明の理だった。

ギミツクは自身の重量を上手く支えることが出来ず、前のめりにゆつくりと倒れる。地震が起きた。

そう錯覚するほど大きな揺れは、近くにいた2人には特に大きく感じた。

心操は尻餅をつき、倒れたギミツクを信じられないといった顔で見つめる。

そんな心操の前に男は立って、手を差し出した。

それを暫し呆然と見つめた心操は、ニヤリと笑いながらその手を取った。



「アンタの名前は？」

試験が終わり、雄英関係者であろう者たちが怪我人の手当てに奔走するのを横目で見ながら、心操はそう言った。

今更なような気がしたが、心操は男の名前を知らなかった。

試験中は聞けるような状況ではなかったの、当たり前のことではあるが。

「ああ…：そういえば言ってなかったな。俺の名前はモラウ＝マツカーナーシ。覚えておいて損はないぜ」

「日本人っぽくないと思ってたが外人だったか、モラウ、うん、覚えた」

「それで…？お前の名前は？まさか自分だけ聞くわけじゃないだろ？」

モラウは不敵に笑いそうだった。

「俺は心操、心操人使だ！」

噛み締めるように心操は言った。

別段自己紹介など慣れたものではあるが、今日は少しだけいつもとは違うように感じた。

それは目の前の男にあてられたからか、今の心操には分からなかった。

「心操か、覚えておくれ。また会うだろうからな……！」

手を突き出し握手を求めるモラウ。

しかし、その手に心操は応えられなかった。

「悪いが、多分これきりだ。お前は受かつてるんだらうよ。そんな凄い個性に身体能力。最後にギミックに時間を取られたとはいえ相当ポイント稼いでるんだろ……？俺はダメだ。どう考えてもポイントが足りない……！」

それは薄々わかっていたことだった。

この試験ではほぼ無個性と変わらない心操は、どう考えたって戦闘向きの者たちと比べればポイントは低いだろう。

それに最後はポイントにならないお邪魔ギミックに時間を使ってしまった。

「お邪魔ギミックに時間を使ったことは後悔してない。お前のおかげで俺が目指していたヒーローを思い出せたからな。それに最後に洗脳で他の受験生の時間を奪っちゃまった。人助けとはいえこの試験は他の受験生の妨害禁止。俺の行動が受験生の邪魔をし

たと捉えられる可能性もある。

まあとりあえず俺は落ちた。お前とは、違う」

それをモラウは黙って聞いていた。

しかし、最後まで聞くと強引に心操の手を掴み、無理やり握手の形を取る。

「おい！俺の話聞いてっ！」

「聞いてたさ……聞いた上で言ってるんだ！お前とはまた近いうちに会うってな！」

「な!?何を根拠に……！」

何の根拠もない慰めだ……心操はそう思った。

しかし、モラウの目を見たらそんな思いは飛んでいってしまった。

グラサンを外し、真剣にこちらを見つめるモラウは、慰めで言っているようには到底思えなかった。

「なあ心操、ヒーローに大事なことはなんだと思う？敵をたくさん倒せる力か？違うだろ……？人を守る力だ。ヒーローの本質は人助けなんだ。それを天下の雄英が分かっているか……？」

大体この試験は明らかに戦闘向けに有利だ。でも、戦闘で役に立たなくなったら人助けが出来る個性だってある。

ならそれを評価する項目だってあるはずだ。違うか……？」

「そうかもしれないが、そんなものは確かめようがない……」

「うじうじするなよ！お前は今日しつかりヒーローしてた！そんなお前を落とすような俺は雄英を自分から辞退するぜ」

ヒーローしてた……その言葉がどれほど心操の心に響くか。モラウは分かっているのだろうか。

心操の目の前の男は、あつたばかりにも関わらず、何故こうも心を揺さぶってくるのか。

誰にも認められず、卑屈になっていた自分を今日ヒーローにしてくれたのはモラウだ。

そこまで考えた時、心操の目からは涙が溢れ出ていた。

それは試験が終わったことでの安心感もあるのだろう。

「おいおい泣くなよ！今泣いたら受かった時に流す涙がなくなっちゃうぞ？」

「うるさい！お前のせいだろ……！お前がヒーローになれるなんて言うから、そんなこと言われたら、もう諦められなくなっちゃうだろうが……！」

「なんだ？諦めたかったのか？」

「そんな訳あるか！ともかく！俺は雄英でヒーローになってやる……！だからお前も俺が落ちてても辞退なんてするな！俺は落ちてたって普通科からヒーロー目指してやる！」

そんな時にライバルがいなかったら張り合いがねえだろ……！」  
涙を拭い、心操は啖呵を切った。

それが実現するかどうかは……今は誰にもわからない。

## 試験結果と戦士の過去1

「実技総合成績出ました」

真つ暗な部屋に映し出されるデイスプレイに、試験結果が投影された。

何の試験結果かと言えば当然雄英高校の入試結果であり、1位から順番に受験生の名前と獲得したポイントが映し出されていた。

ようやく終わったか：試験結果を見て、審査をしていた雄英高校の教師達はそう思った。

毎年のことだが、試験結果の集計には時間がかかる。

それは倍率300倍という圧倒的なまでの受験生の数もあるし、審査方法の問題でもあった。

デイスプレイに映し出される結果には、ギミックをいかに破壊したかを表す通称 ワイラン 敵ポイント。

そしてその横に表示される救助 レスキュー ポイントがあった。

救助ポイントは受験生達には知らされていない項目であり、いかに周りを助けたか、ヒーローたる行動をしていたかを教師達がポイント化をしたものだ。

モラウが予想した通り、雄英高校の受験には戦闘向きの個性だけに有利にならないよう、またヒーローとしての資質の部分を評価するためにこのポイントを設けていた。

これはより良い人材を発掘する為に必要なことではあるのだが、1人1人採点しなければいけないのでとにかく時間がかかる。

敵ポイントのようにただ倒したギミックを集計すればいいのではなく、受験生達の行動をよく観察してポイントを付けていかねばならないので、とにかく精神が磨耗する。

そんな大変な作業であるが、この場でその作業を適当にするものはいなかった。

それは、雄英高校の教師としてのプライドもあるし、何よりも、子供達の未来を担う教師という職についているからこそ手は抜けない。

適当な採点をして、本来合格していた生徒が落ちてしまうなんてことがあってはいけない。

それは教師達の共通の思いであった。

審査が終わった教師達は安堵の息を漏らしながら、受験生の中でめばしい人間を吟味する。

「救助ポイント0で2位とはなあ!!」

画面に尖った髪と野心に燃える目が特徴の男が映る。

男は縦横無尽に市街地を飛び回り、ギミックを破壊していた。

その圧倒的なまでの火力と機動力、そして後半でも動きが落ちないタフネス、その全てがプロヒーローを以てしても唸らざるを得ない才能であった。

男のポイントは敵ポイントだけで77…これは他の受験生達を突き放す圧倒的な数字であった。

しかし、救助ポイントが0ということに人格面での心配を残す結果であるとも言えた。

「対照的に敵ポイント0で8位」

「アレに立ち向かったのは過去にもいたけど、ぶっ飛ばしたのは久しく見てないね……」  
2位の男と対照ということで話題に上がったのは、緑髪の弱々しい印象を受ける少年であった。

不安そうに辺りを見渡しておどおどしている姿は、とても好成績を残した受験生とは思えない態度ではあったが、それでも彼は教師達の記憶に残る偉業を成し遂げた。

お邪魔ギミックの正面からの打倒。

瓦礫に挟まる少女を見た少年は、今まで何故発揮していなかったのか分からない超パワーで跳躍し、拳一発でビル程もある巨大なギミックを破壊した。

それを見た教師達は久しく見ていない光景に湧いていた。

しかし、冷静になって見てみると疑問を感じる所は多々ある。



少年の腕と足は、そのパワーを使った反動か見るも無惨に壊れ、助けが入らなければ着地すらままならない状態に落ち入っていた。

そのことに対して教師達からは疑問が飛び交う。

何故自身の個性で怪我を、何故急に行動を変えたのか。

少年に対する疑問は尽きない。

しかし、そんな議論を大きな声で中断させる男がいた。

「細げえことはいいいんだよ!!俺はあいつを気に入った!!」

そう言ったのは、審査の時号令の合図を務めたプレゼントマイク。

彼は持ち前の通る明るい声で、ざわざわと話し合いをする教師達を一喝した。

理論も何もない言葉だが、彼の性格を分かっている教師達はやれやれと首を振りながらも納得する。

そんな風に少年の話題は終わり、いよいよといった感じで別の受験生に注目が集まる。

それは勿論、まだ話題に出ていない1位の受験生だ。

「敵ポイントが45ポイントで救助ポイントが75。救助ポイントでここまで稼ぐ奴はあまり見えない…」

8位の少年の救助ポイントも目を見張るものがあつたが、それをも超える好成績で

あった。

画面に映るのは、白髪が特徴の少年モラウ、それと別の画面で試験場各所にばらまかれた煙の戦士達。

モラウのこの好成绩は実力というのもあるが、何よりも大きかったのはこの試験との相性であった。

自律する戦闘能力を持った戦士を分散させてギミックを壊す、手数が多い分単純に効率がいい、他の受験生が身一つでやっていることを大人数で同時にやるのだ、効率は桁違いだった。

「応用力で言ったらプロでも見ないレベルだな。ある程度の性能を持った煙人形を数十体出せる、それだけで人手が必要な災害救助で大きく役に立つ」

「そうだな。さらに言えば煙人形が本人の目の届かない所でもちゃんと機能している。あらかじめ条件を決めてプログラムの的に動いているのか。何にしても他の受験生の邪魔にならないよう動き、時には救助を行うとは素晴らしい性能だ……」

「だけどその割に敵ポイントは伸びなかつたな。あれだけの頭数があれば2位の少年くらいポイントが伸びてもおかしくなさそうだが……」

「ギミックを倒すことより、妨害認定されないように他の受験生の救助とサポートを優先させてたからだろ。それにお邪魔ギミックの対処に時間を使っていたからな。しょ

うがないことだろう」

様々な議論が飛び交う。類を見ない盛り上がり方だが、それだけモラウの個性の応用力が高いということだった。

「個性も確かに凄いが、それを使う本人のレベルも高い。お邪魔ギミックを壊す手際はまるでプロヒーローだ。明らかに実戦慣れしているような余裕も見られる。だが、一体どこでこんな技術を…」

ある教師が言ったその一言で更に教師達はざわつく。

モラウは確かにその個性に目を向けられがちだが、それを扱う本人のレベルも異様に高い。

人生がかかった受験とは思えない余裕な態度と、周りを見て行動する判断力は、明らかに実戦経験があるものの動きだった。

しかし、そんな実戦経験を積む機会など、ヒーロー免許を持っていない中学生にはあろうはずがない。

教師達もそれが分かっているからこそ、モラウの出自に注目が集まる。

「両親共にプロヒーローらしい。その影響があるのかもしれない」

「プロヒーロー!? 一体誰だ!?!」

プロヒーローの息子…それならばこのレベルの高さもうなづける。

ヒーロー直々に教えていたのだろう…そんな想像を教師達はした。

そこに納得がいけば、気になるはそれが誰かというこだ。

「スモークマンとバニーオーラだ。どっちも海外から日本に活動を移してきたヒーローだな」

「スモークマンとバニーオーラ!? それってどっちも…」

教師達は聞き覚えのある名前に驚き、だからこそその後の言葉に詰まった。

それは、そのヒーローの現状を知っているからだった。

「……知つての通りどちらも既に亡くなっている。5年前にな……」

「両親を亡くして辛いだろうに、それでもヒーロー志望でくるとは中々のガッツだな」

「そうだな、でもまだ15歳だ、見た目上はなんとも無さそうだが、心には深い傷を負っている筈だ。そこら辺は俺達でフォローしてやらねばいけない」

ヒーローとは基本的にお人好しだ。他人の不幸を憂い、自分のことよりも他者を優先する。

だからこそ、不幸な経歴を持つ少年に同情し涙する。

しみりとした雰囲気の流れるが、そんな時間はすぐに終わりを告げる。

「いつまでも余計な話をしてる場合じゃないでしょう。もつと大事な話がある筈だ。無駄話に時間を割くのは合理的じゃない」

流れを切つてそう発言したのは無造作に伸びた髪と剃られておらず野暮ったく伸びているヒゲが特徴的な暗そうな男だった。

男の名前は相澤 消太。ヒーロー名はイレイザーヘッド。

どこまでも合理性を望む彼は、目の前で繰り返される無駄話に釘を刺す。

それは一見すると冷たい態度に見え、他の教師からは反感を買つてしまう。

「なんだと！それはちよつと冷たいんじゃないか!?教育者としてそういう態度は……」

「勝手に他所様の過去を深掘りして同情するのが教育者ですかね。本人にまだ会つてすらいらないのに。」

それよりも審査で少し言いたいことがある」

反感の言葉をシャットアウトして、相澤は自分の意見を通した。

そんな彼の様子を見て、相澤の古くからの友人であるプレゼントマイクは、相澤をフォローするように言葉を発した。

「審査で言いたいことお!?順位はもう出てるぜえ！後はそれ通りに採用してくださいだろ？」

「…問題は試験の採点だ。採用の人数的に漏れてはいるが、見込みがある生徒がいた」  
合理性の塊とも言える相澤には珍しい回りくどい言い方だった。

そんないつもと様子が少し違う相澤に当然周りの人間も気付く。

「君は38位の彼のことを言ってるのかい？相澤君？」

「ええ……そうです。根津校長……」

相澤の言葉に答えたのは、雄英の最高責任者でもある校長だった。

雄英高校の校長：一体どんな人物かと思うが、それは人ではなかった。

クルクルと回る椅子にちよこんと座るそれは、ネズミであった。

顔に傷があるネズミは、明らかに人の言葉を話している。

その正体は個性を発現させたネズミだ、個性により人間よりも高スペックな頭脳を得たネズミが、雄英高校の校長であった。

根津は、持ち前の頭脳で相澤が言いたいことを理解する。

38位の少年。心操人使。その少年の審査については少しだけ揉め事があった。

まずは少年が洗脳の個性を使い人命救助を行ったことが妨害にあたるかどうか……この問題についてはすぐ結論が出た。

あたらない。

それは当然のことだった。ヒーローを養成する学校が人助けをしたものを妨害で失格にするなどあり得ない。

しかし、困ったのはこの後だ。

洗脳されて人命救助を行ったもの達のポイントについて、心操によつて操られていなければ得ていたであろう敵ポイント：その埋め合わせをどうするか、そこでかなりの論議があつた。

ポイントを与えないというのはあり得ないし、しかしそのポイントをどう与えるか、どの程度与えるかで揉めた。

壮絶な議論の末、結局は根津の一声で全ては決まつた。

「うん……洗脳によつて救助活動を行ったものに救助ポイントを10ポイント、洗脳をした心操君に救助ポイント25ポイント。心操君にもう少しポイントをあげたいが、彼の行動はもう1人の指示によるもの。」

自発的な行動ではないことを考えてこのくらいが妥当じゃないかい？」

根津のその提案に皆が賛成し、その話は一度終わった。

しかし、相澤には一つだけ納得出来ないことがあつた。

「心操は洗脳によつて救助ポイントを得ました。敵ポイントの17ポイントと合算して42ポイント。これでも例年なら受かっているラインです。」

しかし、皮肉にもその心操の行動で得たポイントで心操を超えたものが2名いました。

総合ポイントで言えば心操は落ちていきます。しかし、この試験で明らかに向かない個性でこの成績…そして、自らの個性が試験に向いていないと分かりながらも腐らずに最善を模索する姿勢や、ギミックの弱点を周りを見て瞬時に判断する力。

そして言葉をかけるだけで相手を無力化できる洗脳は、現場において大変有用な個性だと思えます…何卒もう一度考えていただきたい」

相澤は根津を真剣な表情で見る。

その姿勢に驚いたのは周りのヒーローだった。

いつも冷徹で合理性の化け物のような相澤が、1人の受験生にここまで固執する理由が分からなかったからだ。

そして、それは相澤自身もよく分かっていたいなかった。

客観的に相澤の分析をするならば、この試験方法への懐疑的な精神が表に出てきたということだろうか。

この試験は救助ポイントというものが存在してはいるが、明らかに戦闘向き個性に有利なようにできている。

比較的脆いギミック達は、戦闘向き個性ならばあまり考えずとも壊せてポイントを稼



げる。

しかし、救済ポイントを稼ぐということは難しい：表向き知らされていない項目だということもあるし、現場で本当に難しいのは救助だ：それには周りを見て冷静な判断をこなす頭と、実際に現場をこなして得る経験がなければいけない。

しかしそんな経験が当然中学生にある筈はなく、結局は毎年合格するのは戦闘向きの個性ばかりだ。

しかし、そんな状況に相澤は思うのだ。

この試験は合理的じゃない……

例えば、相澤も能力だけでいえばこの試験との相性は最悪だ。

抹消という相手の個性を消す個性は、ロボット相手になんの役にも立たない。

しかし、そんな相澤はプロヒーローとして極めて優秀な活躍をしている。

メディアに出ないため知名度はないが、それでもプロヒーローの間ではその有用性は周知の事実である。

そんな相澤が心操を見た時に思ったのだ。

こいつは見込みがある。

私情かもしれないが、それでもプロに必要な人材だと、そう思ったのだ。

根津に向かって頭を下げる相澤。

そんな相澤を周りは緊張の表情で見つめる。

誰も相澤に茶々を入れようとはしなかった。それは、この場で発言すべきは根津だと分かっていったからだ。

相澤の様子を、根津は外側からはなんとも読み取れない表情で見ていた。

外からはただ呆然としているだけにも見えるが、その実ハイスペックな頭で考えを巡らせているのだろう：それは根津を知る者には容易に想像が出来た。

たつぷりと間をおき、根津は答える。

「そうだね。確かに心操君は逸材だと思う。しかし、それによって試験の順位を変えることは出来ない。相澤君ならわかるだろう？」

無慈悲：しかしそれは正論だった。

いくら見込みあると思っても、試験の結果は既に出ていて、変えることは出来ない。「しかし、救助ポイントの見直しをしていたら順位が繰り上がる可能性もあります」

「救助ポイントについてはあれが限度だよ。散々議論した結果で、他の先生方もそれで納得していた筈だ。そんな状況でもう一度審査を行うのは最良していると思われてもしょうがないことだ。試験には公平性がないといけないのは分かってくれるだろう？」

「はい……分かりました。お時間を取らせてすみませんでした」

相澤は素直に引いた。それは、自分の方が分が悪いことを言っているということが相澤にも分かっていたからだ。

これ以上ゴネたところで変更はない、なのにゴネ続けるのはそれこそ合理性がないことだった。

引き下がる相澤に、根津は待ったの声をかけた。

「早とちりはいけないよ相澤君！試験の順位は変えないと言ったが、それ以外に変えられるものがあるだろう？」

「それは……まさか……！」

相澤は根津が言わんとすることをすぐに察した。

「ああその通り！定員数を増やせばいいのさ！A組とB組で1人ずつ、そうすれば心操君も合格さ！」

一般試験の定員数は本来36。しかし、クラスに1人ずつ増やせば38になり、38位の心操も受かる。

言葉にすれば簡単だが、それは重い決断だった。

「しかし校長！雄英高校は国立高校です！仮にも国が決めた定員を覆すなんて、無理がありますよ！」

ある教師からそんな心配そうな声が聞こえる。

「責任は全て僕がとる！それに、ここはヒーローを養成する学校だよ？機械的に定員を守るだけじゃなくて、必要だと思う人材を取っていくことも必要なのさ！」

胸を張ってそう言う根津。

その姿はネズミでありながら、間違いないく人の心を持った優しい教育者であった。

そんな根津に相澤はもう一度頭を下げ、感謝の言葉を述べた。



自分はこの世界の住人ではないような、そんな疎外感があった。

それを自覚したのは物心ついてすぐで、周り自分との差に違和感を感じていた。

別段見た目がというわけではない、自分も周りも、見た目に差があれど立派な人間だ。

しかし、そんな見た目の話ではなく、魂そのものが別世界の住人のもののような…そ

んな気持ち悪い感覚が常にあった。

両親は普通の人達だった。

優しく、強く、そして温かい：プロヒーローであるらしい彼らは自分のことを息子として扱う。

それ自体は普通のことなのだ。

この2人は自分の親で、自分の名前はモラウ。

それも頭では分かっているし、実際血も繋がっている。

顔もよく似たこの2人は勿論俺の親なのだろう。

だが、2人の顔を見るたびに、俺の心は言う。

この2人は俺の親ではない。

なんて親不孝な考えなのだろうか、それを分かっていたが、頭で分かっても心が訴えかけてくるのだ。

そんな違和感から逃げるように、俺はよく家を抜け出して体を鍛えた。

体の鍛え方なんて知らない筈なのに、俺の体は何故か知っているかのように動く。

体を鍛えている間だけは、違和感を忘れられた。

それに気がついた俺は、毎日家を飛び出してヘトヘトになって帰ってくる生活を暫く続けた。

そんな生活を続けていると両親は心配しだったが、それは笑顔で誤魔化した。

その時の作り物の笑顔は、我ながら気持ち悪かったのを覚えている。そんな生活が変わったのは4歳の頃、ある日突然、俺は体から溢れ出る生命力のようなものに気がついた

溢れ出るそれは自らの意思で自在に姿を変えて、量も大量に出すとかかなり疲れるが、大量に出せば出すほど身体能力は跳ねあがった。

急な超常の力の覚醒に、その時ばかりは同年代の子供のようにはしゃいだ。

興奮しすぎていつの間にかへ口へ口になっていたが、そんなことが気にならないくらいに興奮だった。

クタクタの体に鞭を打って帰路につく。

そんな帰り道にふとこんなことを思った。

他の人達からも生命力は出ているのだろうか。

そう思いすれ違う人々に対して目を凝らす。

そうすると力は目に集まって、いつもよりも視力が良くなった。

この状態ならば見えるはず…そう期待を込めてみた世界は無だった。

無…その表現は少し違うだろうか。正確に言うならば、全くいつもと変わらなかった。

いつもと変わらずに歩く人々…それが無性に怖かった。

それは俺がこの世界の住人ではないと言っているようで、産まれてから感じていた違和感を証明してしまったように感じた。

あまりのことに泣きながら家に帰ったことを覚えている。

恥も外聞もなく、いつもは変に落ち着いて大人ぶっていたのにも関わらず、それを台無しにする勢いで泣いた。

周りを見たくなくて、急いで家に駆け込んで、状況が分からずただあたふたして泣いている自分を見る両親に飛びついた。

そのまま心配そうに声をかけてくる両親を無視して泣いて、泣き止んだ時には辺りは真っ暗だった。

なんとか落ち着いた頭で、こんなことを考えてしまった。

両親からは力が出ているのか：

正直それを思いついた時は怖かった。

ここで見てしまつて、両親から何も出ていなかったら。

しかし、俺はそんな思いを振り切つて目に力を集めた。

それは、藁にもすがる思いだった。

両親からだけでも繋がりを感じたい、そう思った。

両目に集中し力を集める。

僅かな希望に縋り目を開いた時、見えたのは僅かに両親から漏れる力だった。

その日から、俺の違和感は少しだけ消えた。



「合格か。まあ当たり前だがな……」

誰もいない部屋で一人、モラウは呟いた。

それはマンシヨンの高層階の部屋だった。

モラウは窓から夜景を見ながら、持っていたダンベルを置いた。

雄英高校：そこに行けば何か変わるだろうか、モラウはしみじみとそんなことを思った。

この世界に感じる違和感、それが消えたわけではない。

違和感の正体をずっと探ってはいるが、未だにピンとくるものはない。

惜しい所まで行っている気はするのだが、伸ばした手は後少しの所で空を切ってしまう



う。

「こればかりはのんびり考えるしかないか、焦ってもどうしようもない…」  
気持ち切り替えてダンベルを拾い上げ筋トレを続ける。

筋トレ中は違和感が和らぐ、それは昔から変わっていない。

モラウにとって昔から変わったことなど多くはない。

4歳の時にオーラが見えるようになった時、煙管に出会い能力が発現した時、そして両親が死んだ時、思いつく変化はそれくらいだろうか。

しかし、それすらも何故か既視感を感じた。

もうすでに一度経験しているかのような、そんな感覚が後から付いてくる。

思えば入試の時のあの余裕もそうだ、無意識に何かと比べていた。

あの時と比べればなんと甘い試験だろうか…そう思った。果たしてあの時とはどの時なのか、モラウに入試の時以上の実践経験はないはずなのだが、それは分からなかった。

「だが、いつでも新鮮に感じるものもある」

人助けをした後の笑顔…それは何故だがいつも新鮮だった。

## 入学初日と体力試験

モラウの家に合格通知が届いてから時が経ち、日付で言えば4月1日。

多くの学校で入学式が行われているであろう日：そしてそれは日本一有名なヒーロー養成機関でもある雄英高校も同様だった。

新入生達が期待と僅かながらの不安が入り混じった面持ちで学校の門をくぐり、それを見て上級生達は過去の自分を懐かしむ、そんな青春真っ只中と言える光景が広がっている。

そんな光景を尻目に、モラウは何の緊張感もない顔で、口笛を吹きながら門を潜った。180を超える身長：盛り上がった筋肉、そして背中に背負う大きな煙管：正確にはそれを布を巻いたもの、そんな目立つ要素のてんこ盛りのような男が注目を集めないはずがなく、周りではひそひそとモラウについて会話がなされる。

新入生からはおそらく先輩だろうと予想を立てられ、雄英のレベルの高さを感じさせる佇まいに畏怖と情景を。

上級生からは、あんな奴が同じ学年にいたかと懐疑的な視線を向けられる。

その他にも色々な視線が入り混じるが、全てに言えるのは皆モラウのことをとても中

学校を卒業したばかりの新入生だとは思えなかったと言うことだった。

そんな風注目を集めてはいるものの、モラウに話しかけてくるようなものはいない。

明らかに普通でないものというのは、噂にはなれど関わりはもちたくない、普通の人間ならば思う…そう、普通の人間ならば。

「あのお…すみません、教室までの道のりを聞きたいんですが」

それが自らにかけられた言葉と気づくのに、モラウは若干遅れた。

モラウ自身も自分が奇異な視線を向けられているというのは気付いていたので、その中で話しかけてくるものがあるとは思えなかったからだ。

「聞こえてます…？道のりを聞きたいんですが…」

そんな若干の間を聞こえていないと捉えたのか、声の人物はもう一度同じことを言う。

「ん…おお、聞こえてるぜ。まさか俺に話しかけてるとは思えなくてよ、悪いな」

「あ、いえいえ。急に話しかけたのはこちらの方なので…」

モラウに声をかけてきたのはオレンジ色の髪をサイドテールにした女子であった。

160後半の女子にしては高い身長と、勝気な瞳が少女の芯の強さを感じさせる。

まあ…モラウに話しかけた時点で、並の精神力でないことは分かりきっていること

だったか。

モラウは自分に話しかけてくれたことに若干の嬉しさを感じつつ、話を続ける。

「それで？道を教えてほしいだったか。それならパンフレットはどうした？そこに全て書いてあったはずだが」

モラウがそう言うのと、少女はばつが悪そうに目を泳がせる。

「いやあ、パンフレットを家に置いてきてしまいましたして…」

少女は胸の前で指を絡ませながら、言いづらそうにする。

「成る程な、お前クラスは？」

「I—Bです」

「それなら丁度いい、俺はI—Aだからすぐ隣だな。どうせ同じ場所に行くんだ、案内するぜ」

それを聞いた少女は大きく目を見開き、驚愕の声を漏らす。

「嘘…!?アンタ1年なの!?先輩だと思ったから話しかけたのに…!!」

「おう、俺は歴とした1年だが…」

「それならそうと言ってよ。敬語で話して損した」

分かりやすく肩を落とす少女。

別にモラウは上級生であると言っていたわけでもないので勝手に勘違いした少女が

悪いのだが、モラウはそんなことは気にしなかった。

モラウは気の強いものが好きだ。

自身が気の強い性格であるから、それに負けじと対抗してくるようなものが好きなのだ。

モラウの見た目から、大抵の人物は引いてしまうのでそんな人物は同年代には中々いないが、それでも時々目の前の人物のようなものもいる。

そんな人物に初日で出会えたことに、モラウは喜びを感じていた。

「おいおい、勝手に勘違いしてそりやないだろ。失礼なお嬢ちゃんだな」

「それは悪かったよ。でもアンタが同じ年なんて到底思えなくてさ。あと、お嬢ちゃんはやめてよ、同じ年でしょ？」

「と言つてもお嬢ちゃんの名前を知らないからな」

「…それもそうか。私の名前は拳藤一佳。アンタの名前は？」

「俺か？俺の名前はモラウ＝マツカーナーシ。呼ぶ時はモラウでいいぜ」

自己紹介を済ませると、モラウは手を差し出して握手を求めた。

自己紹介後の握手、初対面の女子に対して普通の日本人ならば躊躇してしまうものがあるが、モラウは何事もないように行う。

普通ならば違和感のある行為であるが、拳藤は特に何か言うことはなく、手を差し出

して握手に応じる。

それは拳藤自身の性格がフレンドリーだということもあるし、モラウの海外映画の登場人物のような見た目に握手という行為が似合っていたというのもあった。

2人は並んで歩き、共にクラスを指す。

「ねえ、モラウの個性ってなんなの？後ろに背負ってるのは個性関係のもの？」

お互いがヒーロー科同士であると気づいた拳藤は、それならばと個性の話題を振る。

拳藤にとつて今日初めて会ったヒーロー科の仲間、クラスは違えどどんな個性なのかは気になる所だった。

「悪いがそれは言えないな」

興味深々の拳藤をシャットアウトするようにモラウは言った。

「えー、なんでだよー。減るもんじゃないし教えてくれないだろ？…もしかして私から言えってこと？それなら言うよ、私の個性はっ」

そこまで言いかけた所で、モラウは人差し指を口の前まで持ってきて、喋るなど合図を送る。

それを見た拳藤は、反射的に言葉を止めた。

「お互いのネタをこんな所で言っちゃあ面白くないだろ？個性を披露するならもつとい舞台がある」

「披露する舞台……？それってもしかして体育祭のこと？」

少ないヒントで拳藤はモラウが言わんとすることを理解した。

その理解の速さは、雄英高校が決して個性だけでは入れないことを証明するものだろう。

「ああそうだ。体育祭は決勝は例年1対1の勝負だからな。出来ることならそこで初お披露目の方が面白い」

「そうか……？私はそんなこと思わないけど」

「戦いの中で初めてお互いの手の内を明かす瞬間……それが戦いの真骨頂なのさ。同じクラスの奴らだとそうはいかないだろうが別クラスなら話は別だ……拳藤の個性は体育祭までの楽しみにとっておくさ」

それを聞いた拳藤はなんとも言えない顔でモラウのことを見る。

「やっぱ見た目通り変な奴だな。私は一生理解できなそうだ。」

「まあそうだろうな。こういうロマンや美学は中学上がりたてじゃ分からないだろうよ」

「アンタだつて中学上がりたてのくせに……あつ、私のクラスここだ」

話をしているうちにいつのまにか目的地に着いていたようで、拳藤は指を指しながら、1—Bであることを確認する。

「それじゃあな！案内してくれてありがとう。クラスは別だけどまた話そうな！」

拳藤は笑顔でそう言いながら手を振る。

モラウはそれに手を雑に上げることのできる。

「おう。今度は道案内はしないけどな」

「分かってるって！じゃあな！」

拳藤はクラスの中へと入っていき、すぐに1—Bの生徒達と挨拶を交わしていた。

その光景にモラウは拳藤の社交性の高さを感じつつ、少しだけBクラスの様子を伺う。

（心操はいないか……こりや同じクラスかもな）

そんなことを思いながらモラウは1—Aへと足を向けようとした時、あるBクラスの生徒と目があつた。

金色の髪に何故かキラキラと輝く目が特徴の生徒は、何故かモラウのことを見つめている。

相手もモラウと目があつていることは気がついているようで、指を2本頭の前に持つていき、キザな海外俳優がやるように、髪を払いながらポーズをとる。

（なんだあいつ……ヒーロー科って変な奴多いんだな……）

自分のことを棚に上げて、モラウはそう思った。





個性把握テスト。モラウが1—Aの教室に足を踏み入れてすぐ、後ろから現れたボサボサ髪の自称担任を名乗る男から説明も碌になしにグラウンドに連れてこられ、そう告げられた。

入学式の予定を飛ばして行われた強行は、当然ながら生徒達の反感を買ったが、担任である相澤のヒーローになるならばガイダンスなどして暇はないという暴論で沈黙させられた。

生徒達は各自色々な思いはあれど、相澤の指示に従う。

個性把握テストというと分かりにくいのが、結局の所普通の学校で行う体力テストを個性を使って行うというだけだった。

しかし、個性を使っていきなり言われても、表向きは個性の無断使用が禁止されている現代ではイメージがしにくい。

相澤はそう考えて、クラスの中から個性の使用が慣れていそうなものを見本として使うことにした。

「マツカーナーンシ、中学の時のボール投げの記録はいくつだ？」

「ボール投げ…80メートルくらいでしたかね」

「よし、じゃあ個性を使ってやってみろ。円から出なきや何をしてもかまわない」

モラウの名前が呼ばれたことで、否応なしにクラス中の視線が集まる。

白髪で、筋肉隆々で、何故か大きな煙管をグラウンドに一緒に持ってきた大男。

時間がなく、碌に会話もすることなくグラウンドに集められたA組の面々のモラウに對する期待感は、モラウの予想以上に大きく膨れ上がっていた。

モラウはそんな視線を気にすることなく、煙管を一旦地面に置き、円の中心に立つ。

しばしの沈黙、祈るようにボールを持ち固まるモラウ。

相澤はそんなモラウの様子を不審に思い、声をかけようとする。

おい、そんな声が相澤から出かかった時だった。

辺りに突風が疾った。

いや、それは正しい表現ではない。正確に言うならば突風が疾ったと錯覚するほどのエネルギーの塊のようなものがモラウから溢れ出た。

モラウ自身がオーラと呼ぶそれは、周りからは見ることでできない。しかし、感じる

ことだけならば出来る。

A組の面々は自身に襲い掛かる謎の圧迫感に驚きながら、モラウを見守る。

モラウは全身から溢れ出すオーラをボールを持つ手に集める。

オーラが集中した腕は、本来の腕の太さよりも遥かに太くなり、血管が浮き出ている。引き絞られた腕を体の後ろに構え、体を捻る。極限まで溜めを作り、そして一気に放つ。

凄まじい轟音と共に放たれたそれはまさしく大砲、オーラを纏いながら飛ぶボールは勢いが衰えることなく、肉眼では見えないほど遠くまで飛んだ。

その光景に対して一瞬の沈黙。

「1028m……」

そんな沈黙を気にせずに、淡々と結果だけを告げる相澤。

「うおおおおおおお!!!すげえええ!!!」

「なんだこれ面白そう!!」

「1000メートル越えてマジかよ!?!」

「ケツ!あれくらい大したことねえよ!」

個性を使用しての大記録、それが可視化されたことで、生徒達の気分は一気に上がる。

自分の個性を充分に使える…普段社会から抑圧されていることもあって、それへの期

待感は高まる。

しかし、そんな生徒達を相澤だけは厳しい表情で見つめている。

毎年一年生は、今まで使用が制限されていた個性が自由に使えるとなるとはしゃぐ。

しかし、ここはヒーローを養成する学校、そんなことではしゃいでいてはヒーローなんてとても務まらない。

「面白そうか。ヒーローになるための三年間そんな心づもりで過ごすつもりか?…よし、ここで見込みないと俺が思った生徒は除籍にする」

最下位は除籍：初めはそう言おうと思った相澤だが、クラスの編成を見てそれはやめた。

「見込みなしは除籍って!?!初日ですよ!いくらなんでも理不尽すぎる!!」

相澤の発言に当然ながら生徒達は反感の意思を示す。

「それに見込みなしって!それってどんな基準なんですか!?!せめてそれを言ってもらわないと!」

「基準については言えない。まあ…除籍になりたくないのでならそれぞれ創意工夫を持って臨むことだな。」

理不尽と感じるかもしれないが、ヒーローっていうのはそんな理不尽を乗り越えていく職業だ。

雄英はこれから三年間、君達に苦難を与え続ける。Plus Ultraさ…全力で乗り越えてこい」

それを聞いた生徒達の反応は様々だった。覚悟を決めるもの、逆境に燃えるもの、余裕そうなもの…そして、不安そうなもの。

相澤はチラリとある生徒を見る。

紫髪に限が特徴的なその生徒は、個性を使った体力テストと聞いた瞬間に悔しそうに拳を握りしめながらも、反骨心が溢れる目で周りを見渡していた。

(個性洗脳…そんな生徒がいるのを分かりながら最下位除籍は流石に合理的じゃない…だからこそ、本当に見るべきはこっち…)

相澤はそんなことを思いながら、紫髪の生徒と同様にはしゃぐ様子を見せなかった、緑髪の生徒を一瞥し、テストの準備を始めた。



「なあアンタ!!すごい記録だな!!男らしい記録だ!!」

モラウが握力を測り終わった所で、赤髪の尖った髪が特徴の少年に声をかけられた。

初めはモラウの見た目から遠慮したような態度を皆がとっていたが、テストが進み、記録を出し続けるとそんな様子はなくなっていた。

「おう……！ありがとな」

「俺の名前は切島鋭児郎！よろしく！」

「俺の名前はモラウ＝マツカーナーシ。モラウでいいぜ」

「それじゃ俺も鋭児郎でいいぜ！」

そう言いながら握手を求める切島、その姿は、見た目通りの熱い男であることを証明していた。

「ねえねえ！後ろに背負ってるそのでつかいのはなんなの？テストじゃ使ってないみただけど個性関係のやつ？」

切島と握手をしていたモラウに、別の所から声がかけられる。

声の方向を見ると、ピンク色の髪に角が生えた明らかに異形の見た目をした女生徒が、モラウの布で覆われた煙管を興味深そうに突っいていた。

明るい声とその行動力は、少女の性格を表していた。

「あ、私は芦戸三奈！その切島とは同じ中学なんだ！よろしくね！」

「芦戸な。俺はモラウ。後ろのこれは今日は使う気はないな。個性関係であることは確かだが、今日は身体能力のみで勝負するつもりだからな」

「え……ってことはモラウの個性って単純な身体能力強化じゃねえのかよ！腕とかでつかくなってからそっち系かと思ってたんだが」

切島の疑問にモラウはどう答えるべきか迷う。

モラウは今回の試験では、オーラの力のみでテストを受けるつもりだった。

それは、これまで鍛えてきた体とオーラを記録として把握したいと思っていたからだ。

しかし、オーラはモラウにしか見えないものであるので、それを説明するのは少し面倒だった。

「うーん、まあ身体能力の強化も個性の一部ではあるんだが、そっちはメインの力じゃねえな」

「マジかよ!? あんだだけの記録出しておきながらそっちがメインじゃねえとか、ますます男らしいじゃねえか！」

切島は興奮したように言った。

数少ない会話であつたが、モラウは切島にとって男らしさというのが重要な項目であることを把握した。

「ねえ、その布の下見たいんだけど見ていい？ 私それがずっと気になってたんだー」

芦戸は痺れを切らしたようであつた。

元々それ目的で近づいてきたのであろう、気になつて仕方がないようだった。

「ああこれな、別に隠してる訳じゃないからいいぜ……ほらよ」

モラウはゆつくりと布を取り、今日初めて中身を見せる。

中から出てきたのは当然のことながら煙管。

モラウにとつてはもう見飽きたそれであつたが、2人にとつては違うようで、驚愕の顔を浮かべていた。

「よく映画とかで見る奴だあー！こんなでつかい奴あるんだあ。ねえ持つてみてもいい？」

芦戸の興味は中身を見てもつかかなかつたようで、手を伸ばしてモラウにそうお願いしてきた。

それをモラウはやれやれといった感じで、煙管を渡す。

煙管を渡された芦戸は、その重さに煙管を落としそうになつてしまった。

ある程度重いことは大きさから予想出来ていたことであつたが、モラウがあまりにも簡単に持つていたので、その見た目に反して軽いものなんだと芦戸は思つていた。

「切島これすごい重いよー！私じゃ扱えなさそう。切島も持つてみる？」

「お、それは持つてみたい……じゃなくてえ！これあれじゃねえか!!タバコとかそういう類を吸うやつだろ!?!高校生でタバコなんて男らしくねえぞモラウ!!」



煙管といえどタバコ、いくら個性社会で昔の常識から変わった所が多いとはいえ、タバコが未成年に禁止されていることは変わっていない、だからこそその切島の反応だった。

しかし、モラウはそんな追求は慣れているものなのか笑いながら返す。

「はは！別に違法なこととはしてねえよ。これは俺の個性の発動に必要ってだけだ。心配してるようなことはないから安心しな」

「そうなのか！確かに先生が何にも言っていない時点で問題のあるものじゃねえか。悪かったな、男らしくないとか言つて」

早とちりに気づいた切島は申し訳なきさそうに頭を後ろ手で掻きながら謝る。

「気にすんなよ、これ見たやつは大体同じこと言うからよ。慣れたもんさ」

「そう言つてもらえとありがてえ。やつぱり男だぜモラウ……」

「そんなに褒められると気分がいいな。気に入った、今度何か奢るぜ？」

「そんなことで奢られたら男らしくねえよ！食事は割り勘だ！」

「私は奢つてくれていいよー？何食べようかなあー」

「芦戸は関係ねえだろ!?隙を見てたかるなよ!？」

モラウはそんなやり取りを見ながら、面白い奴らだと、そう思った。



50メートル走、握力、立ち幅跳び、反復横跳び、すでにその4種目を消化し、初めは不安そうにしていた生徒達も、自分の個性を上手く活かせると緊張が解れてきたようで、大體のものは周りのものと談笑する余裕が出てきていた。

そんな中で表情が冴えない生徒が2人：そんな生徒の1人である心操は、個性によって記録を伸ばすクラスメイト達を見ながら、自らの状況を冷静に分析する。

（先生が明確な基準を作らなかつたのはおそらく俺のような個性が原因：洗脳は明らかにこういうテストには向かない：だからこそ順位で基準を作らなかつた。）

もし除籍が生徒達のやる気を引き出すための嘘ならば、順位で基準を作つた方が明らかにいい……なのにも関わらずそうしないということは、あの先生は本当に生徒を除籍にする覚悟があるということだ）

心操はそう結論づけた。

しかし、それが分かつた所で心操にはどうすることも出来ない、周りの派手で目立つ個性持ちに比べて、心操にはこのテストで活かせる個性はない。

そんな状況に歯痒い思いを抱きながら、心操は自らと同じく記録を出せずにいる緑髪の少年を見ていた。

緑谷出久：朝早めに教室についていた心操は、後からきて教室の入口から聞こえてくる会話から、緑谷の名前を知っていた。

名前以外は碌に知っていることはないが、今までの競技の記録から見ると、自らと同じ戦闘向きな個性ではないのだろうと勝手に予想を立てていた。

もしかしたら自分と似たような境遇なのかもしれない：周りを見ながら不安そうにしている緑谷を見て、心操はそう考え、親近感を感じていた。

緑谷は冷静に周りを見る心操とは違い、不安そうだ。

そんな様子を心操は見えていられなくて、気づけば緑谷に近づき声をかけていた。

「緑谷、不安になるのは分かるがそんなに気負ってもしょうがない。俺達みたいな戦闘向きじゃない個性は真剣にテストに取り組むことしかできない。

それも相澤先生は分かっている筈だ。だからこそ順位で基準を作らなかつた。

おそらく単純に記録が低いからと除籍にされるようなことはない筈だ」

それは同じ境遇の仲間を安心させるための言葉だった。

戦闘向きじゃない個性でヒーローを目指す辛さを分かっているからこそ、その苦しみを分かかってやる仲間が必要だと思った。

しかし、そんな言葉をかけられた緑谷は複雑そうで、あたふたとしていた。

「え、誰…？ いやでも心配してくれてるんだよね、ありがとう。でも、僕は別にそういう

わけじゃなくて……あの……「次は緑谷、早く円に入れ」

緑谷の言葉を遮るように相澤から言葉をかけられた。

そうなればこのまま話し続ける訳にもいかず、緑谷は心操に謝りながらボール投げのテストへと向かっていった。

円に向かう緑谷は相変わらず不安そうで、足取りが重い。

心操はそれを見て、自分の言葉が何の意味もなしていないことを悔しく思った。

(やっぱりあいつみたいに上手くは出来ないか……)

心操はチラリと後ろを見る。そこには白髪の大漢がクラスの者たちと談笑している姿が映る。

心操のその視線に気付いたモラウは談笑を中止して心操に手を振ってくる。

そんな気の抜けた様子にため息を吐きながら、前に向き直り心操は緑谷を見つめる。

「このままじゃまずいぞ緑谷君……」

心操の近くで、同じく緑谷を心配そうに見つめる眼鏡の男、飯田天哉は朝、緑谷と仲良さそうに会話をしていた男だ。

飯田も緑谷の記録が振るわないことを気にしているらしかった。

「つたりめーだ！無個性の雑魚だぞ！」

飯田とは対照的に、突き放すようにいう男は爆豪勝己。彼は緑谷を目の敵にしている

ようで、馬鹿にしたように言った。

(無個性、嘘だろ……そんなの俺よりも……)

酷い境遇じゃないか。心操はそう思った。

個性社会において個性がないということは、想像以上に生きづらい。

周りからは常に馬鹿にされてきただろうし、ヒーローになるといっなのは言いづらいことであつた筈だ。

そんな緑谷の境遇を心操は想像し、拳を握りしめる。

そんな心操の想像は概ね当たっている。

緑谷は常に個性がないことへの偏見の目に晒されてきたし、ヒーローを目指していることを馬鹿にされてきた。

しかしそれは過去の話、今の緑谷には力があつた。とあるヒーローから託された力が。

だからこそ緑谷は心操の言葉では安心出来なかつた。

元々テストで役に立たない個性である心操と、力を持っているにも関わらず制御が効かないことで記録が出ない緑谷、同じ記録が出ていないものでも評価が低いのでは圧倒的に後者だ。

それが分かっているからこそ焦る。

なんか一つは記録を作らなければと思い、緑谷は自爆覚悟で右手に力を集めて投げる。

そんな覚悟をもって投げられたボールは……

「46m」

無情にも平凡な記録で収まった。

そのことに緑谷は訳が分からないといった様子で、自らの両手を見つめている。

そんな緑谷に相澤は歩み寄り、何かを告げた。

離れた所で見ているクラスメイト達には2人の話は聞こえず、だからこそ何を言われたのかで話が盛り上がる。

ただ、言われた側の緑谷の浮かない表情から、何かキツイことを言われたのは明らかだった。

そんな状態の緑谷の2投目は、誰もが平凡な記録だと思っていた。

しかし、そんな予想を立てていた周りを裏切り、爆音と共に投げられた球は勢いを落とすことなく空を切り裂いていく。

「705.3m…」

ようやくヒーローらしい記録が出たことに外野が湧く。

その反応は様々で、驚くもの、喜ぶもの、そして何故か怒りを見せて緑谷に詰め寄っ

ていくもの。

そんな色々な視線が入り混じる中で、心操は複雑そうな目で緑谷を見つめていた。



放課後。

個性把握テストの除籍の話は、結局は相澤の皆のやる気を出させるための合理的虚偽ということと幕を閉じた。

それを聞いた生徒達は誰も除籍にならずに済むという安心感と、相澤の話が嘘だったという梯子を急に外されたような驚愕で、阿鼻叫喚の騒ぎだった。

しかしそれも一瞬の話で、放課後になってしまえば生徒達は各々他のクラスメイトと仲を深め、色々な話をしていった。

そんな中で心操は自分の机で腕を組み、何やら考えごとをしているようだった。

「よお心操、考え事か？」

そんな心操に声をかけるものがいた。

心操はその声に反応し、下を向いていた顔を上げる。

「モラウか。いや、別になんでもねえよ」

心操の前に佇むモラウは、相変わらざるの余裕の笑みで心操を見つめている。

「そうか……？それよりもまだちゃんと言わせてなかったな。ひとまず合格おめでとう」  
「ああ、ありがとう」

入学試験以来の会話であったが、心操は今誰かと話をしている気分ではなかった。

心操の頭に映るのは、ボール投げで超パワーを見せた緑谷。

勝手に自分と似たような個性なのかもしれないと親近感が湧き心配の声を出したが、結局は緑谷も周りと同じ派手な個性持ちだった。

それ自体は別にいい。勝手に緑谷の個性を予想したのは心操であり、この話は心操の勘違いで終わる話だ。

しかし、緑谷の個性を見た時心操は思ってしまった。

ああ……お前もそっち側か。

それが心操には悔しかった。

入学試験でヒーローを目指すと言いつつ泣きながら言い、そのために努力をしてきたつもりだった。

ヒーロー科に受かり道が開けたからには、周りを羨み、自らの個性に嘆くことからは卒業した筈だった。

しかし、今まで生きてきた中で心に刷り込まれてきた性根というのはそう簡単には変



わっていないらしく、結局は周りの個性に圧倒されるだけだった。

「テストで最下位だったの気にしてんのか？それなら気にするなよ。お前の個性が活きるようなテストじゃなかった」

「ああ…それは分かってるよ」

それだつて分かってる筈だった。

適材適所。言えば簡単だが、個性の有無に関わらず心操の身体能力はクラスでも下の方だった。

試験に受かってからトレーニングをしてきてはいたが、所詮はここ最近の話。

他のクラスの面々はきつと心操よりも長い期間トレーニングを積んできているのだろう、テストで心操はそれを感じていた。

心操は派手な個性を羨むだけだったが、彼らだつてそれを活かすために心操以上の努力をしてきたのだ。

それが分かってしまったからこそ情けない。

自分は、ヒーローを目指す身体能力も心も、誰よりも遅れていた。

「暗い顔すんなよ…俺は言つたろ？お前の洗脳はいい個性だつて!!話しかけてそれに答えるだけで洗脳できるんだろ？間違いない強個性だぜ!!」

心操の肩を叩きながらモラウはそう言った。

「いや、別にそれを気にしてる訳じゃ！っていうか声がでかい！周りに聞こえるだろう！」  
モラウの声は放課後の教室の中でよく響き、周りにも心操の個性がばれてしまった。  
(クソ……バレたらまた面倒なことになる……)

思い出すのは自らの個性を聞いた時の周りの反応。

これを聞いたものは総じて心操に話しかけられることにびくつきはじめ、敵のような個性だとなじり始める。

ヒーロー科である以上バレずに過ごすというには不可能であるのは心操も分かっているが、今の心理状態でバレたくはなかった。

「えー！心操の個性って洗脳なの!?何それめっちゃ強いじゃん！」

最初に反応したのは芦戸。

何事にも興味津々で元気な彼女らしい反応だった。

「洗脳？すげー！サイドキックとかで欲しいヒーロー多いだろうなあ」

「現場においてかなり有用性のある個性だな。話しかけるだけで敵を無効化できるとい  
うのはそれだけで重宝される」

「それだけじゃなくて災害時にパニックになった人達を強制的に落ち着かせることもできるし出来ることの幅が広い個性だ。個性の条件は話しかけて答えるだけ？知られたら対策は取られてしまいそうだけどサポートアイテムで声を変えたりすれば？機械を

通しても効果があるのかな。例えばスピーカーで流した音声とか、あらかじめ声を録音しておけば本人以外でも使えたりすのかな？いや、本人の音の波長か何かが個性に關わっているのならそれはできない？」

「緑谷がなんかブツブツ言ってる。こええ…」

「洗脳…？それっておい！あんなことやこんなこと出来ちゃうんじゃないか!?おい!?心操！オイラと組んで「アンタは黙ってる」

あつという間に心操の周りには人が溢れて、様々な言葉が投げかけられる。

濁流のように押し寄せるそれに心操は困るが、何故だかいつも感じる嫌悪感のようなものは感じなかった。

(こいつら、俺の個性を聞いてもびびってない……)

洗脳という個性に臆せずにもこんなにも色々と言われたのは心操にとって初めての経験だった。

それに、若干一名を除いて、洗脳の使い方も人助けやヒーローの現場での使い方ばかりで、敵のようだど揶揄するようなことは言われなかった。

こんなにも素直な視線を向けられたことは心操にはなくて、どんな顔をすればいいのか分からなかった。

周りはその心操を置いてけぼりにして更に盛り上がり始める。

心操ではそれをどうにかすることは出来ず、助けを求めるようにこの状況を作った男を探す。

しかしキヨロキヨロと辺りを見渡すが、男はすでにおらず、教室から出て行ってしまったようだった。

(アイツ……まさかわざと!!)

それに気付いた時には既に遅く、原因の男はいない。

心操は更に盛り上がりをますクラスの面々の対処に追われ、結局は自らの個性で黙らせたのであった。